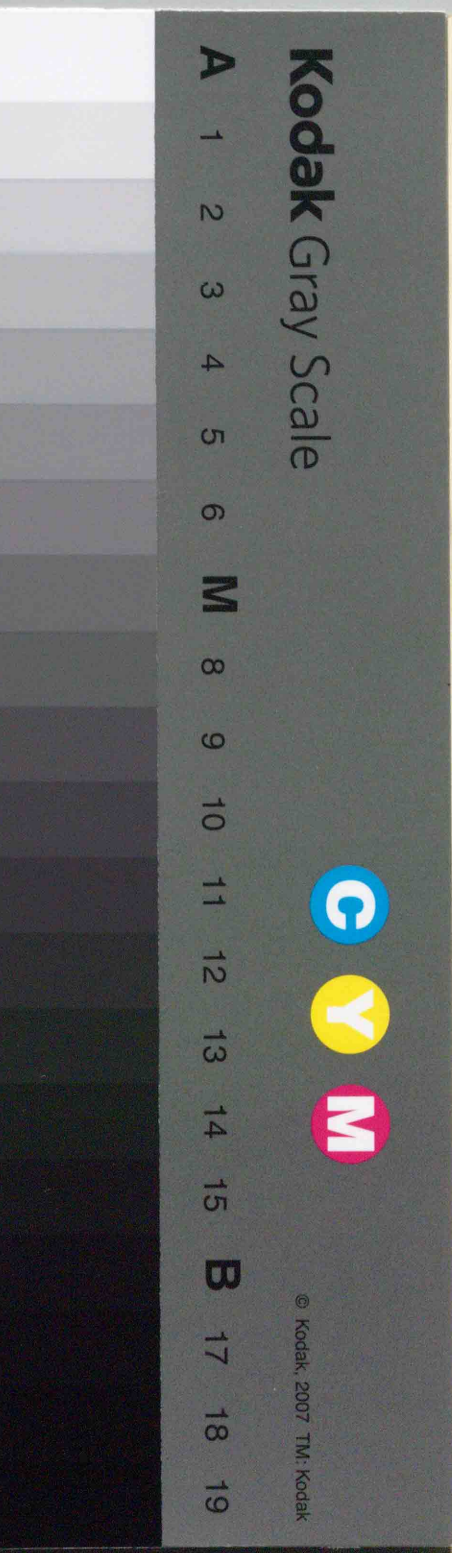
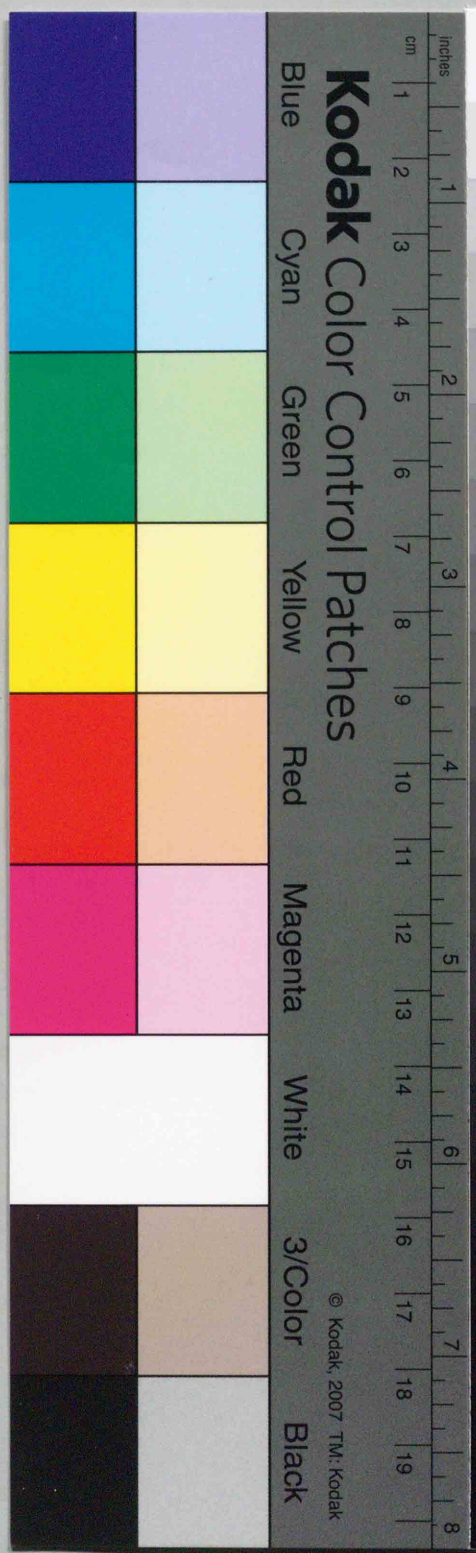
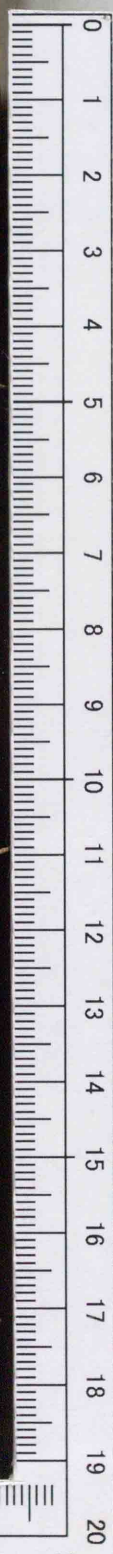


漢文教科書

秋山四郎編

卷之一

4a
820
明35



30335

教科書文庫

3
820
41-1902
20000 67703

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



42
820
B35

資科室

秋山四郎編

漢文教科書

東京 金港堂書籍株式會社



一年生 上杉計衛



漢文教科書例言

一 中學校令施行規則第三條曰。使生徒講讀平易漢文。予乃基其主旨。選平易可喜之文。又設句法練習課。且新作四十餘篇。以成此書。

一 此書共五卷。課之中學全級。即每級為一卷。而每週課業。以二時為準。然以紙數較多。用之課三時者亦可也。

一 我諸家文。於賴襄。則概節取日本外史。於大槻清崇。則選近古史談。依田百川。選譚海談叢二書。三島毅。選中洲文稿。重野安繹。選成齋文初集。其他

漢文教科書

卷之二

金港堂書籍株式會社

書名各具於諸家小傳中。讀者審之。

一節錄諸家文之際。有增減起頭二三字者。又有別作小序。以連接文脈者。其他改訂稱謂者有焉。取敘事。而舍論贊者有焉。此皆出於不得已也。

一句法練習之文。概予所作。自卷之一奇童篇。至卷之三論公德篇。文無署名者。係予起草。而經土屋鳳洲先生改刪潤色也。

一練習課中。使生徒譯國文爲漢文者。欲使知漢文結構。以便於解文義也。非敢教作漢文也。

一支那諸家文。所加批圈。據賴襄評選古文典刑。謝

選拾遺。及增評唐宋八家文讀本也。

一方教授一文章。必不可不豫講之方法。若方法有所不備。則不能完教授之方。予既編此書。更作一書。題曰漢文教科書備考。教師諸君取以充講方法。一助則幸矣。

明治三十四年十一月

秋山四郎識

漢文教科書卷之一目錄

自第一課
至第廿四課 句法及練習

右府察微

奇童

荒木村重

母鳥

威公養士

鶴

簞梅

公德

自
至二七

大槻清崇

二八

賴襄

二八

藤田彪

二九

小川弘

三〇

三〇

楠正行

成島讓

三一

正直

三一

輝虎賦詩

青山延子

三一

狗鷲

三一

謙信給鹽

賴襄

三一

大木

三一

松壽

賴襄

三一

大砲

三四

元就戒諸子

中村和

三四

兄弟分

三五

清正讀論語

大槻清崇

三五

鱒魚

三六

牛董性度

中村正直

三六

怠惰生

三六

徂徠博識

原善

三七

象

三七

林鳳岡

原善

三八

自慢書生

三八

油斷大敵

安積信

三九

公佗兒

三九

漢文卷和書

卷之二

二

全漢書新編校訂卷之二

菅公忠愛

青山延子

四〇

伊率符

四〇

台德公

鹽谷世弘

四一

義犬

四一

函人

中村和

四二

行道

四二

野中兼山

原善

四三

遺金

四三

光圀教頑民

安積信

四四

祭日

四五

仁和寺僧

青山延光

四五

蜘蛛

四六

護良親王

成島讓

四六

服部中佐

四七

本間資氏

賴襄

四八

蠻民

四八

上杉景虎

中村和

四九

龍騰

五〇

德川賴宣

安積信

五〇

惡茶

五一

龜松節錄

依田百川 五一

奇爭

五二

後龜山天皇

徳川光圀 五三

目錄終

漢文教科書卷之一

秋山四郎編

第一課 句法

左の國文漢文を講讀したる後、對照して、漢文の句法を理會すべし。下の句法を示したる諸課皆同じ。

(一) 花が開く

花開

(二) 鳥が啼く

聳は音シヨ
ウ、ソビユと
訓ず。

鳥啼

(三) 山嶽聳立す

山嶽聳立

(四) 河水奔流す

河水奔流

(五) 新田義貞奮戦す

新田義貞奮戦

(六) 天は高く地は低し

天高地低

(七) 櫻花爛漫たり

櫻花爛漫

(八) 僕は中學校の生徒なり

僕中學校生徒也

第二課 練習

左の國文を講讀したる後、漢文に譯すべし。下の練習と題したる諸課皆同じ。

(一) 人は歩み馬は走る

(二) 課業終りて、生徒退散す。

(三) 我が軍進撃す。敵軍敗走す。

(四) 富士山は、日本第一の名山なり。

左の漢文を講讀したる後、或は國文に譯し、或は原文を寫し取りて、それに送假名を附すべし。

(五) 水清流緩

(六) 車馬往來。市街雜沓。

(七) 喇叭之聲嘽嘽

(八) 加藤清正。智勇兼備良將也。

嘽嘽は音リ
ウリヤウ、喇
叭の聲。

第三課 句法

(一) 鶏が卵を産む

鶏産卵

(二) 蛇が蛙を呑む

蛇吞蛙

(三) 寒風膚を裂く

寒風裂膚

(四) 黒雲天を覆ふ

黑雲覆^フ天^ヲ

(五) 白雪原野を埋む

白雪埋^ム原野^ヲ

(六) 梅花清香を發す

梅花發^ス清香^ヲ

(七) 生徒が學業を勉勵す

生徒勉勵^ス學業^ヲ

(八) 孝子は父母を愛敬す

孝子愛敬父母

第四課 練習

(一) 鼠は猫を畏れ、猫は犬を畏る。

(二) 源氏は白色を尙び、平氏は赤色を

尙ぶ。

(三) 農夫は穀物を耕作し、工匠は器物

を製造し、商賈は貨物を賣買す。

(四) 老父酒を嗜む。其の子酒を沽ひて

沽はカフと訓ず。

之を進む。父喜びて之を飲む。

左の漢文を講讀したる後、或は國文に譯し、或は原文を寫し取りて、それに返點送假名を附すべし。下の練習と題したる諸課、皆同じ。

(五) 兄愛弟。弟敬兄。

(六) 河水漲溢。決堤壞橋。

(七) 佐佐木高綱。梶原景季。渡宇治河。爭先登。

先登。

(八) 謙信舉刀擊信玄。信玄以麾扇扞之。

漲溢は音ナ
ヤウイツ、ミ
ナギリ、アフ
ルと訓ず。

麾扇は音キ
セン、ぐんば

いうちは。

扇折被創。

第五課 句法

(一) 人が馬に乗る

人乗馬

(二) 卵が鶏と爲る

卵爲鶏

(三) 漁夫は海邊に住む

漁夫住海邊

(四) 炭が化して灰と爲る

炭化爲灰

(五) 友人が東京に遊ぶ

友人遊東京

(六) 英名天下に轟く

英名轟天下

(七) 軍艦港内に碇泊す

軍艦碇泊於港内

(八) 正成湊川に戦死す

正成戦死于湊川

第六課 練習

(一) 兄は山に登りて兔を逐ひ、弟は林に入りて鳥を捕ふ。

(二) 重盛父に事へて孝を盡し、君に事へて忠を盡す。

(三) 学校の課業は、午前八時に始まり、

重盛事父盡孝
事君盡忠

操はアヤツルと訓ず。
櫓は音ロ、船を進むる具。
丁は音テイ、丁年は満二十年。

- (四) 午後二時に終はる。
- (四) 友人某汽車に乗りて郷里に歸る。予之を送りて停車場に到る。
- (五) 二人乗船。一人操櫓。一人釣魚。
- (六) 源平兩軍戰于壇浦。平軍敗績。
- (七) 男子達丁年。則爲兵士。盡護國義務。
- (八) 全校生徒整列於門外。拜聖駕通御。

第七課 句法

沛は音ハイ、沛然は雨盛なる貌。
蜿蜒は音エン、蛇の行く貌。

- (一) 烈風俄に起る
烈風俄起
- (二) 雨沛然として下る
雨沛然下
- (三) 山脈蜿蜒として長く連る
山脈蜿蜒長連
- (四) 僕は毎日漢文を講讀す
僕毎日講讀漢文

聖世は音セ
イセイ、勝れ
たる天子の
御代。

翩は音ヘン、
翩然は、ひる
がへる貌。

(五) 兄弟の争は、必ず欲より起る。

兄弟之争、必起於欲。

(六) 我が輩は幸に明治の聖世に生る

る

我輩幸生於明治、聖世

(七) 旭旗翩然として春風に翻る

旭旗翩然翻於春風

(八) 明治三十四年、予始めて東京に至

る。

明治三十四年、予始至東京。

第八課 練習

(一) 阿波の鳴戸は、潮流常に渦を爲し、

舟行最も危険なり。

(二) 富嶽巍然として暮雲の上に聳ゆ。

之を望むに光風最も美なり。

(三) 今日一事を記し、明日一事を記し、

渦は音ワ、ウ
ヅと訓じ、水
のうづまく
意。

富嶽は富士
山。

貫穿は音ク
ロンセン、ツ
ラヌキ、ウガ
ツと訓ず。

數はセムと
訓ず。

久しければ則自然に貫穿す。

(四) 明治三十三年十一月、月島丸其の所在を失ふ。世人大に嘆惜す。

(五) 高山彦九郎。嘗過足利尊氏墓。大數其罪惡鞭之。

(六) 嘉永六年。米國使節來我國。請通商貿易。

(七) 阿蘇山。在肥後國。山上常噴硫烟。時

轟は音クロ
ウ、ト、ロク
と訓ず。

厭は音アツ、
オスと訓ず。
婆は音バ、婆
然は舞ふ貌。

或鳴動。其聲轟轟聞於數里外。

(八) 仁和寺僧嘗設宴。一僧醉甚。取小鼎蒙首。厭鼻纒入。乃婆然起舞。一座鼓掌大笑。

第九課 句法

(一) 予は猫を好まず

予不好猫

(二) 課業を怠ることなかれ

肅は音シユ
ク、ツ、シム
と訓ず。

副詞他
副詞
又時必副詞
イ
イ

無怠課業

(三) 教室に在りては靜肅にすべし

在教室可靜肅

(四) 猥に邸内に入るべからず

不可猥入邸内

禁止詞(毋無怠)

(五) 約束は輕々しく變ずべからず

約束不可輕變

(六) 靴弊れて用ふべからず

靴弊不可用

(七) 烟を喫し酒を飲むべからず

不可喫烟飲酒

(八) 利に嚮ひ義を忘るゝことなかれ

勿嚮利忘義

第十課 練習

(一) 公共の建築物及び人家の塀墻門扉等を毀損することなかれ。

喫は本音ゲ
キ、俗音キツ、
クラフ、又は
ノムと訓ず。

(二) 人苟も此の世に生まれば、必ず一事一業を成し、以て其の本分を盡すべし。

(三) 某月某日、本校春季運動會を舉行す。同日午前八時、生徒一同參集すべし。

(四) 僕は一週間修學旅行を爲し、日々山川を跋涉せり。然れども竟に疲

勞を覺えざるなり。

(五) 無見小利。見小利。則大事不成。

(六) 宮城門外。有楠公騎馬銅像。威風凜然。忠勇義烈之氣可想。

(七) 人欲修學業。則嚴守課程。決不可放慢。

(八) 縱勉強學業。不可減睡眠。睡眠不足。則精神衰耗。其爲害不鮮矣。

凜は音リン、凜然は、威光のり、しき貌。
慢は音マン、オコタルと訓ず。
縱はタトヒと訓ず。

輪

也
也
也

宜、最、竟
當、必、き、ア、タ、リ、マ、エ

第十一課 句法

副詞動詞

- (一) 人は宜しく信義を守るべし
- 人宜守信義
- (二) 吾人は當に忠孝を重んずべし
- 吾人當重忠孝
- (三) 品行は須らく高尚にすべし
- 品行須高尚
- (四) 兄弟の子は猶子のごとし

須、最、必、マ

副詞的 物動詞

盍、ナ、セ
盍、何、不
合守

兄弟之子猶子也

- (五) 君盍を僕の家に来たらざる
- 君盍來僕家
- (六) 僕は未だ嘗て游泳を學ばず
- 僕未嘗學游泳
- (七) 彼れは且に郷里に歸らんとす
- 彼れは且に郷里に歸らんとす
- (八) 我れは將に東京に遊學せんとす
- 我れは將に東京に遊學せんとす

漢文新刊
卷之二
金津堂書籍株式會社

我將遊學東京

第十二課 練習

- (一) 少時能く學業を勉勵せば、後當に幸福を得べし。
- (二) 尊氏將に京師を犯さんとする。義貞正成之を拒ぎて利あらず。
- (三) 休日は宜しく郊外に散歩し、清淨の空氣を呼吸し、以て心身を養ふ

べし。

擬は音ギ、ねらひをつくるなり。

白文

- (四) 獵夫雉の叢中に伏すを見、銃を擬して且に發せんとす。雉之を覺知し、俄に飛び去る。
- (五) 健脚者。踏險阻猶行平地。
- (六) 明日某地有競馬。君盍往觀。
- (七) 氣象須活潑。氣象活潑。則百事視其樂。而不視其苦也。

漢文教科書
卷之二
十三

(八) 君父之恩。高於山。深於海。然而吾未能報其萬分之一。誠可嘆矣夫。

第十三課 句法

(一) 生徒が疑ひを先生に質す

生徒質疑先生

(二) 志士は力を國家に盡す

志士盡力國家

(三) 予は嘗て花を芳野に觀たり

予嘗觀花芳野

(四) 賴朝兵を石橋山に擧ぐ

賴朝擧兵于石橋山

(五) 利根川は、源を上野の北隅に發す。

利根川發源於上野北隅

(六) 校長卒業證書を生徒に授與す

校長授與卒業證書於生徒

(七) 校長生徒に卒業證書を授與す

校長授與生徒於卒業證書

(八) 僕は昨日偶然先生に道に遭ひたり

僕昨日偶然遭先生于道

第十四課 練習

(一) 某中學校第一年生某、謹みて書を某先生の坐下に上る。

(二) 伊能忠敬、日本全國を測量す。後人

銅表を東京芝公園に建て、以て其の偉功を紀す。

(三) 某氏一樓を築く。樓上遙に富嶽を西南の際に望む。因りて之を名づけて望嶽樓といふ。

(四) 我が父昨日船に横濱港に乗り、濠洲に發向せり。

(五) 文部大臣至學校。校長延之講堂。生

濠は音ガウ、濠洲は、オー
ストラリア。

延はヒクと訓じ、引き入

る、意。

徒謹聽其訓諭。

(六) 次郎與三郎角觚。誤挫折左手。請治療於醫師。

第は音テイ、又はダイ、邸なり。

(七) 僧昌俊襲義經堀川之第。義經擊破之。昌俊走匿鞍馬山。山僧獲之。僧正谷。縛送於義經。義經斬之。

監察は音カ
ンサツ、官名。

(八) 赤穂遺臣大石良雄等獲仇首。獻之主君墓前。拜跪報狀。請罪監察。官分

拘之四藩。

第十五課 句法

(一) 先生生徒をして漢文を講讀せしむ

先生使生徒講讀漢文。

(二) 塙保己一人をして書を讀ましめて之を講ず。

塙保己一。令人讀書而講之。

(三) 盛徳の君子は、人をして自ら畏敬せしむ。

盛徳、君子、使人、自、畏敬。

(四) 文法を説きて、其の大意を知らしむ。

説文法、使、知、其、大意。

(五) 老婆猫を愛して、常に左右に在らしむ。

老婆愛猫、令常在左右。

(六) 頼朝範頼義経に命じて、平氏を討たしむ。

頼朝命、範頼義経、討平氏。

(七) 區長人民に諭して、悪疫を豫防せしむ。

區長諭、人民、豫防悪疫。

(八) 天子侍臣を遣はして、難民を慰撫

せしめ給ふ。

天子遣侍臣慰撫難民。

第十六課 練習

- (一) 蜀山人は最も狂歌を巧みにし、一首を吐く毎に、聽く者をして捧腹絶倒せしむ。
- (二) 教師生徒を率ゐて海濱に至り、游泳を習はしむ。

索はモトムと訓ず。

慄は音リツ、慄然はおそるゝ貌。

- (三) 忠臣孝子の傳を讀めば、自ら人をして感激して涙を揮はしむ。
- (四) 義經鷲越に向ひ、中道にて日暮る。乃辨慶を遣はし嚮導を索めしむ。
- (五) 昔者使牛輓車。謂之御所車。今也駕馬。謂之馬車。
- (六) 船下富士川。急湍激流。使人慄然。
- (七) 巨鯨入灣内。漁長急傳令。爲發船準。

漢文教科書 卷之二 金澤堂書籍株式會社

登はミノル
と訓ず。

動詞、態度
受動態
各動詞能心

備。

(八) 主上慮氣候不和。五穀不登。屢命侍

臣。就氣象臺問天候。

第十七課

句法

受動態、助動詞其他、言ハ

(一) 入學を請ひて許さる

請入學被許

予

請入學

被許

校長

(二) 父の命に背きて叱せらる

(三) 背父之命被叱

父

(三) 文章を作りて賞せらる。

予 作文章見賞 先生

(四) 敵軍敗走し、或は殺され、或は擒に

せらる。

敵軍敗走。或見殺。或見擒。

(五) 某氏は甚だ朋友に信ぜらる

某氏甚信乎朋友

(六) 兇賊巡查に捕縛せらる

客語ノ場合

客語ノ場合

動詞、
一、付

動詞、
二、付

漢文教科書

卷之二

兇賊爲巡查所捕縛 是所イフニ容ヲハサム

(七) 有徳の君子は、世人に重んぜらる。有徳君子爲世人所重。

(八) 卑劣の小人は、社會に擯斥せらる。卑劣小人爲社會所擯斥。

第十八課 練習

(一) 某生は品行端正にして、且つ學業を勉勵す。故に屢賞せらる。

(二) 調伊企讎節を守りて屈せず。竟に殺さる。

(三) 菅原道眞、藤原時平に讒せられ、遂に筑紫に左遷せらる。

(四) 各國の公使、久しく清兵に攻圍せられ、頗る艱苦を嘗む。後遂に聯合軍に援ひ出ださる。

(五) 某生懶惰放逸。不勉學業。故屢被叱

各口公使久
攻圍頗
爲清兵所
嘗艱苦
聯合軍
後遂に
所援出

可レはキクと訓ず。

旋レはメグル、踵レはキビスと訓ず。

責。

(六) 無賴少年。犯禁登堤上。巡查制之不

可。遂見拘引。

(七) 勿愚弄人。也。愚弄人。則レ已レ亦愚弄乎

人。

完了詞終詞

(八) 光秀弑信長。不旋踵而為秀吉所誅。

天罰不違矣。

完了詞

第十九課

句法

副詞(疑問)

副副記

(一) 是れ等の小事、何レを憂ルふるに足ら

ん。

是等小事、何足憂。

(二) 彼れは頑固なり。安レを能く君の言

を用ひん。

彼頑固也。安能用君之言。

(三) 虎は猛しと雖も、焉レを能く象に敵

せんや。

セツ敵副詞

虎雖猛焉能敵象哉。

感歎完了詞

(四) 彼れは正直なり。豈人を欺かんや。

彼正直也。豈欺人哉。

(五) 日課終りて後遊ばず。豈愉快なら

ずや。

日課終而後遊。豈不愉快乎。

感歎完了詞

(六) 長上の命は、我れ敢て従はざらん

や。

長上之命。我敢不従乎。

(七) 學を修め業を習ふ、亦樂しからず

や。

修學習業。不亦樂乎。

(八) 己れを辱むるは、乃父母を辱むる

に同じきことなからんか。

辱己無乃同辱父母乎。

第二十課 練習

雪はス、メ
と訓ず。

- (一) 余は將に彼れが爲に冤を雪がんとす。安ぞ敢て黙々たるを得ん。
- (二) 國家の法律は、焉ぞ遵守せざるべけんや。
- (三) 國家の大事に臨みては、誰れか敢て義勇公に奉ぜざらんや。
- (四) 公園の樹木を伐採するは、乃公德を傷つくることなからんか。

愠はイキド
ホルと訓ず。
帛は音ハク、
竹帛は、書物
の異名。

(五) 志不確立。則何得忍艱苦。以研究學術。

(六) 聖人。豈不可學而至焉乎。

(七) 人不知而不愠。不亦君子乎。

(八) 立大功。垂名於竹帛。豈非大丈夫平

日之至願乎。

第廿一課 句法

(一) 彼れは樂みて學を修むる者なり

形容句

關係代名詞 m

彼樂修學者也

(二) 我れは勤めて學を修むる者なり
我勤修學者也

(三) 二兔を逐ふ者は、一兔を獲ず。

逐二兔者不獲一兔。

(四) 爰に地圖の彩色を施せる者あり

爰有地圖施彩色者

(五) 尊氏首の義貞正成に似たる者を

此詞今詞
此軌中於

于手ニ用フ

梟は音ケウ、
首を木上に
懸くるを梟
首といふ。

取りて之を梟す

尊氏取首似義貞正成者梟之

(六) 義經執る所の弓を波上に墜とす

義經墜所執弓于波上

(七) 某氏得たる所の金を學校に寄附

す

某氏寄附所得金於學校

(八) 友人が購ひし所の書は、予が書よ

りも美し。

友人カノト所購書シヤク美於予書カノト。

第廿二課 練習

- (一) 先生は、學業を勉勵する者を稱贊す。
- (二) 加藤清正、大艦の天地丸と呼ぶ者に駕す。
- (三) 今人は、古人が爲し、所の苦學を

駕は音ガ、ノ
ルと訓ず。

齋はモダラ
スと訓じ、持
ち行く意。

知らざるなり。

- (四) 野中兼山は、土佐の人なり。嘗て江戸より歸り、其の齋し、所の蛤を城下の海中に投ず。

(五) 汽車經過隧道者。雖白晝猶暗夜。

(六) 天徳寺了伯。嘗招瞽師善琵琶者某。

演平語。

(七) 朋友之間。當以敬爲主。以無圭角爲

了は音レウ。
瞽師は音ユ
シ、盲人の音
樂師。
圭は音ケイ、
玉の名。圭角

はかとばる意。

相歡愛者。不能全交也。

(八) 正成至櫻井驛。大誠正行。因以帝所

嘗賜寶刀。授之訣別。

第廿三課 比較練習

左の漢文を講讀したる後、文字の位置の變化に因りて、意味の異なることを比較練習すべし。下の一課同じ。

給はアザム
クと訓ず。

(一) 佐佐木高綱。給梶原景季。以先登。
給佐佐木高綱。梶原景季。以先登。

(二) 請就師受教

予 就師請受教

(三) 欲乘自轉車至學校

乘自轉車欲至學校

(四) 不食肉飲酒

食肉不飲酒

(五) 生徒在教室大笑。先生大叱笑者。

生徒在教室大笑。先生叱大笑者。

屏はササム
と訓ず。

- (六) 太郎遣次郎於學校。問入學期日。
遣次郎
- (七) 軍令嚴肅。兵士屏氣似不息者。
屏氣
- (八) 人之爲臣者。當盡忠。
臣
- 爲人之臣者。當盡忠。
臣

第廿四課 比較練習

(一) 予不甚好釣

- (二) 予甚不好釣
- (二) 臨財母苟得。臨難母苟免。
- (三) 臨財苟母得。臨難苟母免。
- (三) 僕不盡遺忘。既修學科
- (四) 僕盡不遺忘。既修學科
- (四) 屢招友人不復來
- (五) 屢招友人復不來
- (五) 賢者不必貴。仁者不必壽。

賢者必不貴。仁者必不壽。

(六) 食西洋料理。而不皆盡。

食西洋料理。而皆不盡。

(七) 二人行逢雨。而不獨霑。

二人行逢雨。而獨不霑。

(八) 北清之戰。清軍不常勝。

北清之戰。清軍常不勝。

以上廿四課の學習に由りて、句法の大要を理會したる後、其の學力を應用して、左の諸篇を講讀すべし。

霑はウルホ
フ、又はヌル
と訓ず。

搜

右府察微

大槻清崇

信長嘗自剪十指甲。使侍臣收其剪餘。侍臣搜索左右。久而不去。信長問。汝何故不退。答曰。剪餘既得九。而未見其一。信長爲起拂兩袖。則爪片墜者一。信長大賞之。曰。人之用心。當如此緻密。

奇童

有一幼兒。機敏絕倫。人不能難。或聞之。

緻は音ナ、密なり。

漢文抄和書 卷之二

金海堂書齋林氏會社

家康十一

威公は徳川
頼房卿の私
諡。水戸二十五
万石
三百年前

威公養士

藤田 彪

威公養士。恩威并施。嘗就國。有岩本越
中者。放銃獲鷺於城上之樹。公召詰之。
對曰。臣善病。聞食鷺可癒。當時唯鷺是
視。不視府城。然臣之與鷺孰重。公笑曰。
汝與法孰重。越中屈服。公竟舍而不問。

鶴

獨逸村落有。高塔。鶴巢其上。乳三雛。鶴

舍は置なり。
ゆるしおく
意。
鶴はコフと
いふ鳥。

霎時は暫時
なり。

箠は音フク、
えびらとい
ひ、矢を盛る
器。
福原は攝津
に在り。

朝出暮歸。以為常。一日塔火。鶴望烟而
還。盤旋空中。霎時忽下。銜一雛。移他處。
再來。又銜一雛去。三來。則煙燄鬱勃。鶴
衝而入。更索一雛。不得。遂自焚死云。

箠梅

小川 弘

福原之役。梶原景季折梅花一枝。插之
箠。以自標。及入城門。敵四面萃之。其父
景時既引軍去。景季馬蹙。兜墮。背巨巖

漢文抄和書

卷之二

三十

金海堂書齋林氏會社

海防集

卷之二

金洲堂書

繚亂は音レ
ウラン、亂れ
散る貌。

自防。梅花繚亂。猶與八騎鬪。景時還軍
救之。景季奮擊。斬菊池高望。而出。景季
風流勇名。由是聞于世。

公德

人人加意尊重公共之物。謂之公德。而
往往缺學舍器具。或折公園花木。視以
為常。至甚。則詣神祠佛宇。題柱扉。以其
本貫姓名等。此向世上自表。裸其不德。

謂言
謂尊
公德
公共之物

本貫本姓

題柱扉其本貫

姓名

題其本貫姓名

ヲ柱
之非

悲痛(中シイイム)
考妣(親シム)

後詞

樽(口)

考は歿りた
る父。

也。愚亦甚矣。無學之徒。姑舍之。苟稱學
生者。不可莫所自戒也。

楠正行

成島讓

楠正行。正成。長子也。年甫十一。訣父還
河内。既聞父死。湊川。悲痛欲自殺。母趨
止之。曰。先考豈教汝殉邪。要將在起兵
討賊。以靖國難也。正行愧止。自此嬉戲
常為搏戰馳逐之狀。日以討賊復讎為

海防集

金洲堂書

畔境

後(後セ急ニ定メ)

決(判決)

兩造は原告被告なり。擬はナゾラフと訓ず。

事

正直

甲乙村人争畔不決。甲謂乙曰。聞本日官遣吏來視。幸就乞裁判。乙曰。可。但余今日刈稻忙甚。子獨往。并陳余言。後得一報。則足矣。甲於是自往訟理。擬兩造既得決歸至。曰。曲在我。

輝虎賦詩

青山延于

略(カリ)

藝(文リ)

能州は能登の國。謙は音エン、宴と同じ。三更は夜十二時なり。

上杉輝虎勇略絶人。善用兵。每臨行陣。馳行軍中。數次隊伍乃定。雅好藝文。其征能州。適值九月十三夜。會諸將。燕飲賦詩。曰。霜滿軍營。秋氣清。數行過雁。月三更。越山并得能州景。遮莫家鄉憶遠征。其風流如此。

狗鷺

助動

鷺居海邊者。名狗鷺。不能自沒。水獲魚。

漢文新刊

卷之二

金澤堂書籍株式會社

鷲は音ガク、
ミサゴとい
ふ鳥。

廿五
リ大カ
リ

常立巖上望之。偶見鷲銜魚而揚。則徐
追之。鷲輒避而高揚。隨追隨高。及其高
極急逼之。鷲竟放魚。鷲即承之於空中。
云。蓋鷲之初徐追鷲者。欲其高揚也。欲
高揚者。欲便於空中攫放魚也。

謙信給鹽

賴 襄

今川氏眞

信玄國不濱海。仰鹽於東海。氏眞與北
條氏康謀。陰閉其鹽。甲斐大困。謙信聞

之。寄書信玄曰。聞氏康氏眞困。君以鹽
不勇不義。我與公爭。所爭在弓箭。不在
米鹽。請自今以往。取鹽於我國。多寡唯
命。乃命賈人平價給之。

大木

米國白根畑山脈一帶。深林蒼鬱。夙名
於大木。其木似杉。蓋稱世界第一。落落
排雲霄。相傳經二千年。其尤大者。直徑

漢文抄
卷之二
金港堂書籍株式會社

孔道は大道なり。

四十尺。高及四百尺。嘗開孔道於林中。而巨幹盤根。連結層累。不可伐除。乃穿幹通路。車馬往來。不少礙云。

松壽

賴

襄

松壽は毛利元就の幼名。

髻鬣は音テウシン、七八歳の童子を髻鬣といふ。

松壽幼有器量。其保嘗抱之。濟水而躡。溺。保惶懼謝罪。松壽曰。行道而躡。常也。庸何傷。比髻鬣詣嚴島神祠。既歸。問從者曰。汝輩何祈。曰。祈郎君主安藝也。松

壽曰。汝盍祈吾主天下。夫願主天下者。能主一方。願主一方者。能主一國。今願主一國矣。其所成可知已。聞者奇之。

大砲

大砲以長大稱。梅谷則名於肥大。皆角觝之雄者。一日二人散步于橫濱市街。衆爭出觀之。莫不驚嘆。一歐人偶來。亦注視。乍進比肩。梅谷稍高。頗有得色。又

漢文抄
三十四
金港堂書籍株式會社

進比大砲。低甚。恰似兒童倚壯夫。歐人
竊苦笑。顧望大砲。匆匆趨去。

元就戒諸子

中村 和

元就病將死。致諸子於前。取箭數條。一
如其子數。自糾爲一束。極力折之。不能
折也。單抽其一條。隨折隨斷。因戒曰。兄
弟猶此箭也。和則相依濟事。不和則各
敗。汝等勿忘。隆景進曰。夫兄弟之爭。必

糾はアハス
と訓ず。

起於欲。棄欲思義。何不和之有。元就悅
曰。宜從仲兄之言。

兄弟分

一紳士散策郊外。乞丐進曰。兄弟分。少
垂憐。紳士顧笑曰。吾兄弟無乞丐者。丐曰。
四海之內。皆兄弟也。紳士頷曰。然。探懷
投文久一枚。丐顰蹙曰。吝矣。紳士曰。四
海之內。皆兄弟也。汝盍遍就四海兄弟。

顰蹙は音ヒ
ンシユク、眉
をひそむる
なり。

金海堂書集卷之三十一

各乞一錢。汝富必倍於我輩矣。

清正讀論語

大槻清崇

清正航海歸肥後也。駕大艦呼天地丸者而西。船間日讀論語。以朱墨自句。清正有所愛。胡孫遊戲不離側。偶起之廁。胡孫闚其亡。竊把朱筆。縱橫塗抹卷上。清正復坐視之。笑曰。汝亦有志聖人之道乎。復研朱墨。句而不輟。

船は音サウ、
洞の間とい
ひ、船の中央
の處。
胡孫は猿な
り。

鰐魚

南米熱地多鰐魚。人畜動輒被害。而其捕猿尤巧。云鰐往林下水濱。潛身現頭。一猿偶見。便報之。群猿來折林樹。投之。鰐為不知。以任其所為。猿初怪不敢近。後漸近。漸狎。已而群猿手相繫。累如連鎖。終撫鰐頭。鰐忽開大口吞之。群猿驚散。

牛董は英國人にして、重力の眞理を發明せし者。蹴は音シク、ケルと訓ず。

牛董性度

中村正直

牛董性度溫和。遇意外之事。不動聲色。一日牛董出書室。歸則見其所愛之狗。蹴倒火燭。案上堆紙。悉成灰燼。蓋積年所刻苦。測算者也。牛董既老。知不可復再。痛惜不措。然不加一毆打。特睨狗曰。汝作害于人。而汝不自知乎。嗚呼。

怠惰生

赧然ハ音メ
ンゼン、赤面
する貌。

或謂余幼時在小學。避教師視。喜竊嬉戲。師一日戒衆生曰。汝等近來怠甚。今後有怠者。宜互來告。余意謂某生平日不與我相協。若有所見。便當告之。後數日。某生果怠。因走報師曰。善矣。但誰認之。余赧然悟曰。此我自報己之怠慢耳。

徂徠博識

原善

大岡忠相。聞徂徠博識。洽聞無所不知。

眷は音ケン、親屬なり。矢はツラヌと訓ず。縷縷は音ルル、續きて絶えざる意。

將試問以躡其答。乃招問曰。世有鼠婚之說。何謂也。徂徠答曰。事出於某年某人所著一小說也。乃其書所載鼠類之眷屬名姓。矢口縷縷如注。忠相始服其彊記。

象

象群處深林。熱則游泳。川流出入成群。每群有長。或數十。或數百。擁隨其後。長

團糕は音ダシカウ、團子なり。

貴戚は、蓋徳川幕府の一門を指せるならん。

行亦行。長止亦止。進退一聽。象王所令。幼兒行緩。牝母以鼻捲抱而前。不紊其列。云其性溫柔。不輒怒。然見欲害己者。則大怒。疾走如風。奮鼻卷人。拋之空中。承以雙牙。貫其胸腹。如串團糕爾。

林鳳岡

原善

林鳳岡。爲人豪俊。雄邁嘗詣貴戚。主人固重鳳岡。乃延與坐。款語時天寒。鳳岡

款は音ク
ン、誠なり。

豊饒は音ク
ワクシヤク、
すこやかな
る貌。

喫煙且傲然曰。老人頭冷。不得不用巾。
即取諸懷中著之。既而主人拊鳳岡背。
曰。膚理潤澤。豊饒哉。老翁也。鳳岡曰。肩
下作痒。少伸手搔之。

自慢書生

村學有一生。慢罵自豪。每日黎明。與衆
生俱登校。途上常凌壓衆生。衆生苦之。
一日衆相語曰。此地多蝮蛇。生曰。何足

畏。乃如熊狼。亦當搃殺之。既而一生前。
注視草間曰。蛇在。蛇在。生一瞥失色。叫
而走避。一生追報曰。非矣。只是廢繩耳。
生面俄發赤。爾後不復爲慢語云。

油斷大敵

安積 信

永井尙政。嘗詣井伊直孝。問居官之要。
直孝曰。善哉。問予少就仕途。敷歷諸官。
以至於老。不無所得。然不可輕授。須齋

敷は音イ、改
なり。

宿は夙に同じ、早なり。

戒受之。乃刻日。尙政宿齋戒。著禮衣。而至。直孝亦禮服出見。正色誨之曰。諺云。油斷大敵。此一語不可斯須忘也。

公佗兒

公佗兒屬食肉禽類。度其兩翼長九尺。羽黑。頸生白毛。狀如環。頂則禿。蓋公佗兒嗜食斃馬牛。其見有之也。群聚爭啄。頂首觸接。毛羽為剝。竟不復生。遺傳成

矯矯は勇強なり、又高く擧がる貌。

五朝は、清和陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝なり。替は音テイ、廢なり。獻替は可を獻じ、否を替つる

性。其雛亦禿頂云。此鳥多栖于南米安埵須山。其飛翔至於海面上。一里二十町之高。蓋羽族中最矯矯者歟。

菅公忠愛

青山延于

菅原道真。歷事五朝。尤為宇多帝所親任。帝嘗好遊獵。道真諫止之。隨事獻替。多所匡救。及被配。閉門不出。託文墨自遣。雖謫居無膠。未嘗忘忠愛之意。一日

なり。
重陽は、五節
句の一、陰曆
九月九日な
り。

遇重陽。賦詩曰。去年今夜侍清涼。秋思
詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持每
日拜餘香。聞者莫不感歎。

伊率符

希臘人伊率符。初傭耕在田。有一旅客
過。指前村問曰。赴彼處要幾時間。伊答
曰。第行矣。客慍曰。所答與所問左。吾唯
問其時間耳。曰。第行矣。客怒罵而去。伊

左は戻なり、
違戻の意。

視其行歩曰。二時間而可也。客顧詰之。
伊曰。不知汝行歩遲速。安得計所須之
時間。

台德公

傳記不忠

鹽谷世弘

台德公偉度宏量。幼時使人讀書而聽
之。猝有怒牛登堂。奔突戶障。左右錯愕。
失厝。公神色自若。閱書不輟。豐臣太閤
與諸將觀猿樂。有虎破檻出。走攀堂階。

厝は音ソ、失
厝は、あわつ
る意。
檻は音カン、

猿樂ハ散
集ナリ
依音集

をりなり。

睨
ハミラム

諸將或起或走。虎進向加藤清正。清正按劍叱之。轉近公坐。公端坐睨之。虎乃去。

義犬

有少年牽赤黑兩犬來。逐入之海中。兩犬爭先游泳。有間回頭望陸而還。赤常在先。黑則似稍疲者。赤屢顧後而待。如將扶之者。已近岸。赤一躍而上。黑則不

能。於是赤再投海。欲援黑。上岸高。赤又率黑。遍索坦處。纔得上陸。赤黑相依。掉尾而去。觀者皆歎其友誼。

函人

中村 和

某侯使函人作鐵甲。成欲試之。矢。函人曰。臣能以身當之。乃擲其甲而坐。侯命善射者。以強弓勁矢。利鏃射之。中胸。鏗然矢躍而不入。侯曰。善。吾既試其前矣。

函は音カン、
鎧なり。

鏗は音カウ、
金石の聲。

未知其後何如。將試其背。函人釋甲而號曰。臣未慣作怯者。甲請辭。侯曰。吾過矣。賞之以金。

行道

人之行道路。取左為通法。有一人。取右而往。巡查呼戒曰。宜從左。其人曰。道路公衆所共。左右唯從吾意。勿多為冗語。巡查懇諭曰。固如子言。但市街雜沓。宜

抵牾は音テ
イゴ、ふれあ
ふなり。

互避。抵牾。聞歐米都會。行路自然有制。人善守焉。無煩多言。今余發冗語。子聞冗語。共是國辱。子之犯法。又加一辱。其人如有所悟者。從路左而去。

野中兼山

原善

野中兼山。土佐人。嘗來江戶。及歸期也。致書鄉人曰。土佐無物不有。自江戶齋歸。惟有蛤蜊一艘耳。海路幸無恙。以歸

蛤蜊は蛤なり。

日饋之。衆以為嘗異味。計日待歸。既至則命投其所漕於城下海中。不餘一箇。衆怪問。兼山笑曰。此不獨饋諸卿。使卿子孫亦飫之也。自此後。果多生蛤蜊。遂為名產。衆始服其遠慮。

遺金

或遺金七百圓於途。乃託新聞社募拾者。曰。當謝以一百金。有人拾之來報。遺

失者俄詰曰。我金本有八百。今唯七百。是子既私一百也。拾者怒。訴之官。官吏一瞥。知其偽。判曰。遺失者言。金本有八百。而拾者即曰七百。是別有遺七白金者也。若至他日。無有其人。則當照法規為拾者之有。若其遺失八百金者。則姑待後報。

光罔教頑民

安積信

鞠は音キク、罪人を吟味するなり。

水戸封内。有弑父者。吏捕而鞠之。將處極刑。民性愚。生長山谷。未嘗知倫理。乃不承曰。我若殺人之父。則當受刑。今我殺吾父而刑之。何冤也。吏以聞。公召儒臣曰。以此頑民付汝。三年受業。宜竭力教導。懈將罪汝也。儒臣教督甚至。未三歲。民稍解讀書。始知弑逆之為大罪。甚慙。自請就刑。然後誅之。

祭日

東京市祭日。多出大車挽之。呼曰山車。車上所粧載。有摸武將者。有擬仙妃者。有神翁。有快僧。有烈士勇婦。其他種種。不遑枚舉。高各丈餘。神彩飛動。鼓笛合奏。喧闐如沸。觀客簇擁其後。而街上各戶。剪綵造花。絛之傘。周邊名曰花傘。樹之簷頭。連翩燦爛。一望欺春。如此者凡

喧闐は音ケンテン、かまびすしきなり。絛は懸なり。

三日滿街人殆欲狂亦昇平之餘澤也。

仁和寺僧 青山延光

仁和寺僧嘗設宴一僧醉甚取小鼎蒙首壓鼻纔入乃婆然起舞一座鼓掌大笑舞罷欲脫鼎不得面腫滿鼎血涔涔下衆蒼黃欲毀鼎痛楚不可勝往謀之醫醫亦束手乃還寺衆環視無策一人曰極力脫之縱失鼻耳猶不至死衆然

涔は音シ、涔涔は雨多き貌是れは血の流るゝ貌をいふ。

之遂齊力挽之乃脫鼻耳皆墮僅得免死。

蜘蛛

蜘蛛謂蛺蝶曰君知僕居乎整麗可愛旋繞登階眺望極佳蛺蝶曰唉辭聞攀子家階者不再下來蜘蛛曰曷有此事吾視子狀似稍倦者請憩僕牀蛺蝶曰亦辭聞臥子牀者無有寤者蜘蛛偽窮

唉はア、と讀む歎き恨む聲。

尙僕は音コ
ウロウ、せむ
しなり。
冒は音ケン、
綱にかゝる
なり。

南都は、大和
の奈良。

引決は、猶自
殺の如し。

姑顧言他頃之曰君風采何揚也精緻
之羽清透之眼其美不可言乃如僕貌
扁平醜陋尙僕可笑呈諛百端蚘蝶遂
欣然展翼飛揚乍冒蛛網不能脫云

護良親王 成島 讓

護良親王戰敗走匿南都般若寺一乘
院僧好專將兵來圍時早晨從者適皆
外出王計不免將引決偶觀佛殿有三

唐の僧玄奘
三藏天竺よ
り經文を持
歸り之を漢
譯せり。

大函盛大般若經其一脫蓋乃跳入函
中以經自覆賊遍搜索及經函而王所
匿以其蓋開不檢而去王意彼若再來
索則危矣遽移入別函好專兵果還傾
倒空函展經諶曰不見大塔王惟見大
唐玄奘三藏耳咲而去

服部中佐

明治三十三年六月太沽之役海軍中

拒は音ク、後
拒は後陣な
り。

奠は音テン、
ス、ムと訓
じ、物を神前
に薦むるな
り。

佐服部雄吉率陸戰隊。與各國聯合軍
共進。各國軍爲先鋒。我軍爲後拒。已迫
砲壘。敵彈雨注。先鋒赧赧。中佐見之。切
齒。麾隊兵突進。忽中丸斃。舉軍咸歎稱
其忠勇絕倫。翌年六月。聯合軍總指揮
官獨將和留垵流筮來我邦。過伏見。差
副官奠花環於中佐墓。以祭之。嗚呼。中
佐。一死。名耀四海矣。

我が軍は、新
田義貞の軍。
將軍は、足利
尊氏。

軼はスグと
訓ず。
箭は音カ、ヤ
ガラといひ、

本間資氏

賴 襄

湊川之戰。兩軍相持。未戰。我軍有一騎。
挾弓立岸。呼曰。將軍西來。必載津妓。置
酒高會。請進一物。佐酒。注箭而俟。適有
鸚攬魚而舉。乃馳而射之。斷其隻翼。墮
敵舟中。兩軍謹呼。尊氏使人問其名。答
曰。東人或識。請投刺焉。復發一箭。軼三
百步。貫船舷。尊氏視其箭。彫於箭曰。相

箭の幹。
本間孫四郎
資氏。

模、人本間資氏、敵中傳觀。資氏揚扇呼
曰、方今戰國、一矢可愛。願見返賜。賊中
有答射者、箭不達岸。我軍齊笑。

蠻民

凡、動物中有等殺階級。莫甚於人類。蓋
由於智識有明暗。習俗殊文野也。近徵
之我邦、如北海道、愛乃、臺灣、生蕃、比之
本土人、其懸隔果何如也。雖然更有甚

殺は音サイ、
等殺は猶等
級といふが
如し。

蜥蜴は音セ
キエキ、とか
げなり。

記は記憶な
り。

焉。如濠洲蠻民、殆有意想不及者。試舉
其一斑、民無定居。常食草根昆蟲蛆及
貝類。饗膳以蜥蜴及蛙為最上珍味。至
其猛惡者、則嗜食己子。而知覺鈍劣。計
數至五個以上、則茫然不能記之。噫、亦
甚矣。

之島ヲフヨム

上杉景虎

中村 和

足利義輝畜猛猿。見人必怒跳躍。常入

巡禮は、各地を巡行して、神佛を禮拜する者。

所は語の辭處は居なり、止なり。

之于桺。景虎至京。義輝欲以猿試其勇。景虎察知之。乃使侍臣鬼小島彌太郎伴爲巡禮。懷果往與之猿。猿喜食之。又置果于桺外。猿延臂將取之。彌太郎握其臂。磨之桺木。猿伏而泣。翌日景虎入見。彌太郎從焉。義輝豫令吏牽猿居其所過處。猿視彌太郎低首舐地。景虎徐行。

龍騰

空氣流動。激蕩旋轉爲渦。謂之龍騰。世俗所謂龍卷。其實則旋風也。或起於陸。或發於海。其於海則捲萬斛潮。直接雲天。望之如建一大圓柱。時或有見數大圓柱。行動不止。已圓柱離海而昇。俗謂之龍上天。至其起於陸者。則發家屋拔樹木。人畜倒。土石飛。嘗起於上野國邑。

樂郡。捲長柄明神祠前。一大石華表而去。不知其所之云。

德川賴宣

安積 信

憾はウラムと訓ず。

元和元年。東照公征大阪。賜公旗幕。從軍。五月七日。公聞先鋒接兵。馳至則戰已訖矣。見東照公泣曰。兒不幸不得為先鋒。故不及戰。殊可憾也。松平正綱在側。慰之曰。公妙齡。後來臨陣。必多矣。不

尸子といふ書に、虎豹之子。雖未成文。已有食牛之氣とあり。

坐湯は入浴なり。

須深憾。公怒曰。唉。正綱。謂賴宣再有十四歲之時乎。東照公悅曰。今日使賴宣有戰功。不若此一語為雄偉也。列侯在座者。皆感歎。以為有食牛之氣。

惡茶

一書生自擬貴公子。坐湯于上州伊香保。寓某樓。隣室有紳士。往來相親。一日紳士語曰。此地清爽。宜養痾。獨憾茶味。

呂ハリス

淹は音エン、
ヒタスと訓
ず。淹茶は猶
茶を入ると
いふが如し。

不佳。因遠購之。東京公子曰。僕謂逆旅
大抵供惡茶。此家所供。殊不然。幸來僕
室品之。紳士欣然曰。是亦奇矣。隨入室。
公子揚揚呼樓主曰。淹茶來。樓主左右
視曰。今日公子急聲曰。何不明言。樓主
私語。且謝曰。前日所供。即隣客之滓耳。
乞恕。乞恕。

龜松節錄

依田百川

煬は音ヤウ、
火の熾なる
をいふ。熾は
音シン、燃え
残りの木。煬
燼は、燼を吹
きて、熾に燃
やす意。
櫛は音ハ、柄
なり。

信毛之界有破風山。灌莽數里。豺狼害
稼。村民交番守之。民總右與兒龜松往
焉。日暮龜探木於屋後。父煬燼造飯。俄
有巨狼入。嚙其脚。驚左顧。銳牙入頤。父
大呼曰。兒何在。龜應聲來。鎌貫狼口。櫛
折。即倒執鎌。抉之。狼傷益怒。又手舉石。
槌鎌背。深入數寸。狼張爪欲起。龜乃爬
抉其眼。大吼一聲死。龜顧視其父。則創

重不能起。負而歸。傳藥數日。乃愈。龜時年十一。

奇爭

炎暑中。一客旅行。勞頓甚。入村家賃馬。馬丁從焉。行二三里。炎威愈旺。而不見人家。與樹林。因下馬。就其陰。蹲踞少憩。馬丁進曰。大家我賃吾馬耳。未及其陰。請更納其價。客佛然曰。何其言之悖。既

借馬。何須賃其陰。馬丁掉頭曰。否否。馬雖賃。陰則未。喧爭移晷。而馬則去。就隄下。食青草。視二人爭論。猶東風過耳。不復知暑熱。爲何物也。客竟不能強。曰。還抵駐在所。質之巡查。於是再跨馬。尋來路而去。

後龜山天皇

德川光圀

後龜山天皇。諱熙成。後村上帝第二子。

阨は音アイ、
狹き所。

也。母嘉喜門院。幼觀放鷹于菜摘川。有
 巨石負松。顧侍臣曰。持致內廷。將以獻
 上。及還索之。泣且不止。侍臣采一小石。
 著以松枝。昇至進之。若重不任。帝曰。不
 是。侍臣誑曰。向致此石。當阨不通。有修
 驗者。過呪之。石忽變小。臣復請再呪。如
 舊。修驗者曰。前路多阨。大乃難通。臣然
 其言。且持至耳。帝色解曰。憾不復喚。修

驗者來。呪以小汝大虛言也。衆服其慧。
 皆謂德業可期。

漢文教科書卷之一

金港堂書籍株式會社

漢文教科書卷之一終

同	同	同	明
三十五年	三十四年	三十四年	治
三月	十一月	十一月	三十四年
五日	二月	八月	日
發行	日訂正再版印刷	日發行	日

漢文教科書
定價金參拾錢

著者 秋山四郎
東京市麴町區永田町二丁目廿八番地

發行兼印刷者 金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者 原亮一郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地
右社長

賣捌所 各府縣特約販賣所

明治三十三年三月十一日
文部省檢定
中學漢文教科用書

著作權所有

